～幕府伝習方オランダ人の太宰府訪問～

幕末の太宰府において、八月十八日の政変により京の朝廷から追われた三条実美ら尊攘派の五人の公家「五卿」が長州藩から太宰府・延寿王院に移り、帰京するまでの3年間を太宰府で過ごしたことはよく知られています。

この五卿が転座してくるおよそ10年前、幕府の海軍伝習所の一行が太宰府を訪れています。安政5年（1858）10月19日のことです。これは、福岡藩主黒田長溥のかねてからの招きによるもので、一行は幕府の役人や勝海舟をはじめとする伝習生とカッテンディーケ以下のオランダ人教師および通詞（通訳官）たちでした。幕府の役人と伝習方を迎えるにあたり、藩から太宰府周辺の村々へ応対の仕方に関する達が出され、観世音寺村の大庄屋であった高原善七郎がその内容を書き留めています。蒸気船で博多に上陸した幕府一行は、翌日に太宰府を訪問し、同所において昼食をとる予定になっていました。賄いに必要な費用、食糧の調達は村々の負担とされ、観世音寺村では鶏・家鴨・米・茶・みかんを買い求めています。さらに、馬・草履・草鞋・莫蓙・薪など移動に要する物も村で用意しなければならず、一行が通過する村々では、みだりに見物することは禁じられ、往来筋の掃除と道筋の案内が命じられました。

太宰府を訪れた伝習方のオランダ人は5人で、うち3人は60才代、2人は若者でした。彼らは、太宰府天満宮にも参詣しており、その時の様子について善七郎は「蘭人天満宮神前に参り只々詠（眺）め居中候、夫より会籠（回廊）・絵間（馬）等見物いたす」と書き記しています。また、村で調達した鶏や家鴨を生食にして醤油をかけて食し、その他の食糧や酒は自前で持ち込んでいたというオランダ人たちの食事の内容も記されています。当時、村において幕府一行の応対をするということは一大事であったと思われますが、オランダ人たちの太宰府訪問を地域の人々はどのように見ていたのでしょうか。興味はつきません。

太宰府市公文書館　太田黒　真美